

奥の視点による“看取りの場所”の建築論(2)*

—『讃岐典侍日記』(下巻)に関する一考察—

川本 豊^{*1}, 市川 秀和^{*2}

Topo-logical Study of “Oku” on the Place of Deathbed in the classical literature (2),

in case of the “*Sanuki no Suke Nikki vol.II*”

Yutaka KAWAMOTO ^{*1} and Hidekazu ICHIKAWA

^{*1} FUT. Graduate School, Faculty of Engineering

In this study (2), “*Sanuki no Suke Nikki* (diary) *vol.II*” as a text, we also try to explore the mentality of the Dwelling from the point of view of “Oku” mentality. After the death of the Emperor *Horikawa*, the court lady *Nagako* agreed to serve the new Emperor *Toba*, a boy of four. “*Nikki vol.II*” is made up of her reminiscences of *Horikawa* in the place of new Court, so complexed Time, one of the elements of four “Oku” mentality, is watched out especially in this article. In “*vol.I*”, characteristic Space spreading own outside is found out, then in “*vol.II*”, characteristic Time spreading own inside is drawn out. And also the relationship between Space and Time is verified by “Oku” at the same time.

Key Words: 奥, 看取り, 追慕, 時間, 建築論, 讃岐典侍日記

1. はじめに

現代日本の超高齢社会で大きく取り上げられる「住まい」と「看取り」の関係は、過去においても同様に重大事であり、人間の生と死をめぐる根本的な住まいの建築論的課題である。先稿⁽¹⁾では、この課題を究明する考察対象として日本古典文学に着目し、その中でも天皇の死という特殊な事象が展開された作品として有名な平安後期の『讃岐典侍日記』(上巻)の建築論的読解を試みた。ここに記述された「看取りの場所」をめぐる分析概念としての「奥」による考察を通して、崩御の看取りという特異な状況で繰り広げられた空間現象、「看取りの場所」の構造とそこに巡る心性を見いだす作業を行ったのである。そこから「奥」は、空間と時間という二面を合わせ持っており、まず空間的には、物理的な固定性がなく融通無碍に変化し多重の観点を保持する場所として位置付けられることが指摘された。これを受けて本稿は、亡き天皇への「追慕の記」とされる『讃岐典侍日記』(下巻)を取り上げる。下巻の記述描写にある、作者の長子は院命により亡き主堀河天皇の喪も明けぬうちに、再び幼い鳥羽天皇に出仕を余儀なくされ、その幼い新しい主の眼前において繰り広げられる現実の出来事と、最期を自分が看取った亡き旧主への追慕・回想とが複雑に交錯する「奥」なる場所における時間性を中心にすえて考察を行う。これにより「追慕」までも含んだ「看取りの場所」の全体構造が読み解かれることになろう。

2. 『讃岐典侍日記』上下巻の位相

2.1 「看取りの場所」(上巻)から「追慕の場所」(下巻)へ

先稿に続き本稿でも着目する『讃岐典侍日記』(以下、『日記』と略称)は、「上巻」が、堀河天皇の発病から崩御までの一か月間に亘る「崩御看取りの記」であり、「下巻」が、白河院の命により鳥羽幼帝への再出仕をしながら、

* 原稿受付 2020年5月29日

^{*1} 大学院工学研究科博士後期課程 社会システム学専攻・建築学コース

^{*2} 工学部・建築土木工学科 教授
E-mail: yutaka-kaw5@nifty.com

そこで展開される故院への「追慕の記」とされる。ここでの中心テーマである「天皇の死」という事象のもつ重さは忘れてはならない。この『日記』は、既に現代では取り上げられることの少ないテキストではある。しかし『徒然草』に「鳥羽院幼くおはしまして、雪の降るに、かく仰られけるよし、讃岐典侍が日記に書きたり。」⁽²⁾とあり、中世を通じて、そのテーマの重さゆえに、作者の名とともにさまざまに読み継がれた作品でもあった。

『日記』執筆の順序は、「上巻」が7月の崩御から再出仕までの比較的短い期間で、つぎに「下巻」が鳥羽帝を退出後のあまり時を空けないしかるべき時期、そのまとめとして現在上巻の冒頭に挿入されている「序」の部分が執筆されたとされている。その文体の傾向は、石井文夫によれば次のように概括⁽³⁾される。（下線、引用者）

上巻は、天皇崩御という切羽詰った状況下で、客観的に日時を識別することができないまま、事がらをその起ってくる順序に連続的にのべている。下巻は、客観的にとらえた時の経過の枠にはめて、事がらを月ごとに分けて断続的にのべている。表現のしかたについても、上巻は、感情が先にたって言葉が後に従う、いわば情意的文章とすれば、下巻は、感情を抑えて言葉を尽す、いわば説明的文章といえよう。

国文学的視点ではその通りであろう。しかし、その逆もまた観取されるのではなかろうか。つまり、上巻の方が却って、客観的日時はともかくとして、感覚的には時系列的出来事として理解しやすいように思える。また、下巻は逆に、月次の行事に沿った記述があるにも拘らず、時系列が混乱して、捉え難くなっているのである。この理由のひとつとして、上巻が臨終の出来事という事実の記述であり、下巻は追慕という回想の事象がその中心であることが考えられる。言い換えれば、上巻は、現実世界としての「顕界」（堀河帝の病床）での出来事に限られているが、下巻では「顕界」（鳥羽帝宮廷）の出来事のうえに、現実ならざる世界としての「冥界」⁽⁴⁾（堀河帝への追慕・回想）への往信がかぶさって、両者が交錯していることに起因するであろう。このことについては、本文を読み解きながら確認することとしたい。そこに、当時の時間感覚（認識）がみてとれるのではないかと推測しているが、その前にテキストの上下巻を貫く平安後期「院政」の実像を捉えておきたい。

2.2 時代背景としての「院政」

当時の院政とは、天皇家の家長である上皇が国政に関与し、それを主導する政治形態である。藤原氏を外戚としない後三条天皇が治暦4年（1068）に即位し、摂関家をさしおいて親政を行い早々と譲位し、その治世方針は子である白河天皇に引き継がれた。これは後三条天皇が上皇として自ら関与補佐するための譲位であったと思われるが、譲位後幾許もなく亡くなった。従って院政という政治形態は、実質的には、白河天皇の第二皇子である堀河天皇がわずか8歳で即位した応徳3年（1086）から始まった白河院政を嚆矢とする。堀河天皇は在位のまま崩御したため、第一皇子である鳥羽天皇（5歳で即位）の御世にも継承され、さらに次の鳥羽院政と続く。この狭間にあって院政を布くことなく若くして早世した堀河天皇が『讃岐典侍日記』の作者藤原長子の主であった。

院政の執行者である上皇は、天皇の尊属親（この場合は実父となる）に限られたという事実は、天皇家の略系図をみると実父からその子へと一直線に移行しており、図像的にも裏づけられる。そこには時代背景として、同じ血族の中でも母系親権から父系親権への移行・強化が観取されよう。さらにこの時期になると、社会的背景のみならず、天皇自身の意識にも変化がみられるのである。益田勝美は、天皇が、死穢を忌むことによる清浄性に裏打ちされたその神聖性を保持する聖別者としての重みを自らの負担（負の存在）としてとらえるように至った⁽⁵⁾とする。たとえば鳥羽帝の場合を『長秋記』からその実態を述べる。長承2年（1133）9月18日の条⁽⁶⁾によると、堀河朝までは御剣は必ず「夜の殿」の御所にあり、主上も必ずこの「夜の殿」で寝ることになんら疑いもなくそれがなされてきた。しかし次の鳥羽・崇徳の代になると他所にて寝ることもあったと記される。天皇と宝剣は、自らを神聖化するシンボルであって不二一体であったが、ここに至って崩れてしまう。今日的に言えば、院政期は、天皇が、人間性に目覚めたともいえようが、一方で、その聖性が希薄化する時代でもあったのである。

堀河天皇が病床でとった次のような行動とは、さほどの年月を隔てることもないながら隔世の感がある。

「せめて苦しくおぼゆるに、かくしてこころみん。やすまりやすう」とおほせられて、御枕がみなるしるしの箱を、御胸のうへに置かせたまひたれば、まことにいかに堪へさせたまふらんと見ゆるまで、御胸のゆるぐさまぞ、ことのほかに見えさせたまふ。（p.399）

これは『讃岐典侍日記』（上巻）第6段の記述である。死の床にある堀河天皇は苦しさのあまり、枕もとの神璽の箱を胸に当てようとさえる。天皇家が営々と保持してきたその聖性が凝縮した箱によって、自らを苛むこの病苦を何とかできないかという切実な、しかも苦渋の思いである。ただし家という伝統には保守的であった堀河

帝も、けだし長子との関係においては、そこから一步踏み出す自由を獲得していたと考えられる。ここでも天皇自身の内における微妙な変化が兆していることはみてとれる。しかし時代はもはや動いてしまっている。天皇が自身の内において、聖なる「神」から「人」への転化を図りつつあるとすれば、それにかわる聖性を見つけ出さなくてはならない。神器と天皇との不二一体が崩れつつあるなかで、動かないモノとして、神器の聖性の肥大化が求められる。やがてその位置は取って代わり、天皇の位置を凌駕していくことになる。この意味においても院政期とは、まさしく古代から中世へと橋渡しをする過渡期でもあった。『讃岐典侍日記』（上巻）が、崩御の悲しみのさなか、昼の御座の方で、堀河帝の「御帳こほつ音」と「神璽、宝剣のわたらせたまふとて、ののしりさぶらふぞ」という代替わりのざわめきの記述で締めくくられているのがその間の事情を象徴的に表している。

さらに付け加えるならば、院政期とは、本稿に即して言えば、天皇に対して、上皇の在り様はいわば「奥」に相当し、まさしく時代の政治形態が、空間・時間現象という文化や思想にも投影されているといえよう。

3. 時間構造について

本文読解に入るまえに、時間の構造についても確認をしておかねばなるまい。「看取り」あるいは「死」を考えるにあたって、「時間」が密接に関係してくるからである。まず加藤周一による時間の型⁽⁷⁾を見ておきたい。

かくして日本文化のなかには、三つの異なる型の時間が共存していた。すなわち、①始めなく終りない直線＝歴史的時間、②始めなく終りない円周上の循環＝日常的時間、③始めがあり終りがある人生の普遍的時間である。そしてその三つの時間のどれもが、「今」に生きることの強調へ向かうのである。（番号は、引用者追加）

しかし、ここでは、さらに別の時間のとらえ方にも留意しておかなければならない。加藤の場合は近代的合理主義に基づいた認識であり、院政期の時間を考える上では誤謬を生じることになるやも知れないからである。そこで永藤靖の論⁽⁸⁾を引いてその一助としたい。永藤が採る古代人の創出した神話や文学作品を素材にその心の内部をさぐる方法論は、本稿と流れを同じくする。歴史的時間を非可逆的で一回起性のものとし、対して、神話的時間として、可逆的・反復的構造を付与する。さらにその神話的時間のなかに、循環的時間構造（持続的時間）と振動的時間構造（断続的時間）の二つの特徴を認めている。

循環するという時間のイメージの特徴は、それが一つの流れを持った持続であるという点にある。しかし時間観念の乏しい神話の中では、時として私たちに時間的世界として認識されているものが、空間的な世界として描かれている場合がある。たとえば昼夜の観念がそうである。神話の中に現れる昼や夜は、時間的なイメージを含まない。昼から夜へ、夜から昼へという移りいく時間としてとらえるのではなく、昼と夜を空間として考え、その間には移ろいゆく連続ではなく、むしろ断絶があると考えている。すなわち昼と夜は対立する両極であり、この交替はあたかも時計の振り子のような振動としてとらえられるのである。（p.14）

2つのことに留意しておきたい。1つは昼と夜の非連続性であり、もう1つは、時間認識における空間性である。一般的に「奥」は主として空間的な位置についての言葉としてとらえられがちであるが、わが国においては古来より時間性をも含む言葉であることは、先稿でも確認したところである。

さらに、三宅和朗は、同じく古代の1日は、昼と夜の区別とともに、両者の間の境界的時間帯として朝と夕があったと指摘⁽⁹⁾する。異類の活動は夜を待たず夕方から始まるとし、朝は、夜における異類の跋扈の痕跡に驚愕する時間帯としてとらえる。それぞれがその入り口として存在していたと考えられる。昼は視覚が優位性を持った顕界として、夜は視覚以外の感覚が鋭敏に動員される冥界、そしてその境界として朝・夕という構成である。これは院政期という『日記』の時代においても未だ失われてはいない心性であろう。以上は具体性を持った1日において巡り来る時間感覚である。

抽象化された時間感覚として、日記文学が、回想される過去と、回想する執筆現在という二重の時間構造を有し、それを内面的な全体に統一するのは執筆時の作者の主観とされる。さらに付け加えるならば、日記を読む読者の時間があるろう。日記の読解には、作者側の2つの時間と読み手側の時間という3者が交錯するのである。

以下、これらを念頭に置きつつ、『日記』（下巻）にみる「追慕の場所」が現象する構造を読み解くこととする。（なお、原文引用書および参考諸書等は先稿と同じである。）

4. 追慕の場所の現象（１） — 悩む長子

4.1 追慕という時間の始まり —昔のみ恋しくて

嘉承2年（1107）7月19日、堀河天皇は29歳で崩御する。下巻の書き出しは、同年10月の記事である。

〔1〕「過ぎにし年月だに、わたくしのもの思ひののちは、人などにたちまじるべき有様にもなく、見苦しくやせおとろへにしかば、いかにせましとのみ思ひあつかはれしかど、御心のなつかしさに、人たちの御心も、三位のさてもものしたまへば、その御心にたがはじとかや、はかなきことにつけても、用意せられてのみ過ぎしに、いまさら立ち出でて、見し世のやうにあらんこともかたし。君はいはけなくおはします。さてならひにしもぞとおぼしめすこともあらじ。さらんままには、昔のみ恋しくて、うち見ん人はよしとやはあらん」（p.430）

自らの辛い運命を決定付けられて3か月たらず、自宅に下がって喪に服す長子に、幼い鳥羽帝への再出仕の命が白河院より届く。幼帝は誰であろう故院の「御かたみ」であり、ゆかしく思われることも事実である。しかし自分の子ではない。複雑な思いが胸中を巡る。稲賀敬二が「堀河院の愛情についての自負と自信を持つ彼女は、同じく堀河院典侍である宗子が覚暁を生んだ事例を、きわめて複雑な気持ちで受けとめたであろう」⁽¹⁰⁾と述べるように、自分も故院の忘れ形見をもうけられたかもしれないということが脳裏をかすめたことは想像に難くない。なぜなら「奥」にもろとも（この言葉については後述する）あった自分であり、それ故にこそ、堀河帝を「人」として一人の苦しむ病者として向き合いつつ、2人のまなざしの交感を描くことができたという自負は失われているからである。「思ひ」や「御心」と、これらは内省表現である。さきに日記における時間表現についてのべたが、この部分はそのいずれにも属さない、回想される過去と、執筆現在とを往還する運動性（揺らぎ）が感じられる。いいかえれば時間の空間性が表れているともいえる。そして結局次の言葉に行き着いてしまう、つまり「昔のみ恋しくて」と。やがて月も変わり11月19日、故院月忌みの追善供養の法会に、家人の反対を押し切って大雪をおしても堀河院に参上することで、ようやく自身の奥なる心のバランスを保っているのである。

4.2 追慕と回想の「入れ子」 —はぢがましきのみよに心憂くおぼゆ

次の第4段は、同年12月、鳥羽天皇の即位に帳あげを務めた段である。

〔4〕ほのぼのと明け離るるほどに、瓦屋どもの棟、霞みわたりてあるを見るに、昔内へ参りしに過ぎざまに見えしほどなど、思ひ出でられて、つくづくとながむるに、北の門より、長櫃に、ちはや着たるものども、蘇芳のこき、打たるくはうこくの出し衣入れて、持てつづきたる、べちにおもしろく見ゆべきことならねど、所がらにや、めでたし。人ども、見さわぎ、いみじく心ことに思ひあひたるけしきどもにて、見さわげども、ただわれは、何ごとにも目も立たずのみおぼえて、南のかたを見れば、例の、八咫鳥、見も知らぬものども、大頭など立てわたしたる見ても、夢の心地ぞする。かやうのことは、世継など見るにも、そのこと書かれたところは、いかにぞやおぼえてひきこそかへされしか、うつつにけざげざと見る心地、ただおしはかるべし。（p.437）

ここで留意すべきは、その場所としての風景描写であろう。实景のていねいな記述は上巻では見られなかったものである。以降にもよく空間描写がなされる。なぜなのか。上巻では時間記述はあいまいである。しかし、出来事としての看取りという事実が、死というゆるがせない時系列に向かって肅然と進行しており、そこでは空間（風景）の描写は必ずしも必要とはみなされない。それがなくても場面の成り行きが理解されるのである。つまり空間性が後退しながら依然として優位性を保っているといえる。下巻では、月次行事に沿って明確な時間表現をとりながら、回想という場面はその時間を行きつ戻りつすることになる。そこでは逆に時間性が優位性を保ちながら後退しているともいえる。その補完としての空間（風景）描写といえよう。時間と空間との相互作用がここにうかがえる。さらにここでの時間表現をみても、懐かしい昔日と、参内しているその日と、加えていつぞやの『栄花物語』（『岩佐版』では単に歴史物語としている。）を読んで想像した日々などが混然と入り混じっている。「夢」と「うつつ」の心地として記されており、回想の重層性がみてとれる。これは時間における「入れ子」表現の一樣態ともいえよう。

4.3 追慕の深まり —たがひたることなき心地して

年が改まり嘉承3年（1108）元日、いよいよ皇居に参内する。その馴れ親しんだ空間に再び身を置くことになってますます亡き堀河天皇が偲ばれる。

〔5〕朔日の日の夕さりぞ参り着きて、陣入るより、昔思ひ出でられてかきぞくらさる。局に行き着きて見れ

ば、こと所にわたらせたまひたる心地して、その夜は何となく明けぬ。

つとめて、起きて見れば、雪、いみじく降りたり。今もうち散る。御前を見れば、べちにたがひたることなき心地して、おはしますらん有様、ことごとく思ひなされてゐるほどに、「降れ、降れ、こ雪」と、いはけなき御けはひにておほせらるる、聞こゆる。こはたそ、たが子にかと思ふほどに、まことにさぞかし。（pp.439-440）

引用部冒頭では、故帝のご存命時にはよくあったように、ちょっと他所にお渡りになっただけなのだと自分自身を偽ることによって、かろうじてその夜を過ごしているのである。事が展開される場所は変わらない。しかし受け止める側の思いは、すでに自身の思いとは裏腹に、時間とともに変わってしまっている。ここに「空間」と「時間」の変化率の差異が示されているといえよう。そのズレも、現実の場所からの、さきの『徒然草』が取り上げた「降れ、降れ、こ雪」と、あどけない幼帝の口ずさむ声でかき消されてしまうのである。本文において、たびたび声（音）が場面転換において効果的な役割を与えられていることは留意すべきである。

4.4 回想と現実の交錯 ―世はかくもありけるかな

摂政忠実が参内する。上巻でもたびたび記述された天皇としての「表」（政・公）がやってきたのである。その場に居合わせた人々は端に退き居ずまいを正す。「奥」から、政務の場として「表」への転回である。

〔6〕 昼つけて、殿参らせたまひて、人々みなほりなどすれば、ものを参らせさして立たんも、おとなにおはしまいしにぞ、さやうのをりもわからず立ちしか、また、おとなしうなども告げさせたまひしか、これは、うちすてて立たば、よきことやいはれんずると思へば、なほゐたるも、かくこそありがたかりけることを心にまかせて過ぐしけん年月を、いかで思ひ知らざらん。はしたなく思へば、うちうつぶしてゐたれば、御障子の外にゐたる人たちに、「あれは、たそ」と問はせたまふ御声、聞こゆ。「それ」といらふるなめり。御障子のうちに近やかについゐて、「いつよりさぶらはせたまふぞ。今よりはかやうにてこそは。そも昔の思ひ出でられたまひて恋しきに、そのかみの物語してなぐさめん」などある、いとななし。（pp.441-442）

何の御返りかは申さん、もの申されねば、「思ひかけざりしことかな。かやうに近やかに参りて、ものなど申ししこととは、思はざりしかな。例ならでおはしまいしをりなど、御かたはらに添ひ臥させたまへりしをりに参りたりしかば、御膝高くなさせたまひて、陰に隠させたまひしをり、かやうならんことどもとこそ思はざりしか。げに陰にも隠れさせたまひしかな。世はかくもありけるかな」といひかけて立たせたまひぬる聞くぞ、げにと心憂き。

（p.443）

今は、幼帝に食事を差し上げている最中である。かの故院のときは、と思わず思い出す長子、そしてそれをそのときは気にもかけずに過ごしたことをあらためて記さずにはおられない。御障子の外と内とのやりとりの表現は当時の身分制に則った空間的秩序を明確に示している。そして、やはり同じ想いでこの場にいる摂政殿との対話になる。そこで披瀝されるのは、長子にとって大きな思い出事の1つである御膝の陰の件である。ある時間と空間を共有しえた者同士が、奥におけるさらに「奥」の現出という、何ものにも代えがたい故院との近い距離感覚として、回想しあっている。そこには「世はかくもありけるかな」という、これも同じ時間を共に経験したという想いが伝わってくる。ここでも、御膝で几帳をつくってもらった長子と故院との回想、そのことについて摂政忠実との回想、あるいは故院への単純回想、そしてそれらの回想の時間的立ち位置である鳥羽帝へのお仕えの場所、そして執筆している時、などなど比較回想の時間性として、さまざまな時の表出がここでは幾重にも複雑に交錯していることがみてとれる。

5. 追慕の場所の現象（２） ―内裏にてありしところ

嘉承3年（1108）3月、いつものように故院の月忌みに参上する。

〔9〕 昔の清涼殿をば御堂になさせたまひて、七月までは、宵曉の例時たえず、二十人の蔵人町、左近の陣など、僧坊になりたり。内裏にてありしところども、さびしげなる、見るにも、うせさせたまへりけん院のうちの、ひきかへかいすみさびしげなるを、御覧じて、

影だにもとまらざりける雲のうへを玉のうてなとたれかいひけん

とよませたまひけん、げにとぞおぼゆる。（p.446）

ここでも上巻には見られなかった具体的な風景描写があり、堀河院の変貌ぶりがつぶさに述べられる。かの

「玉のうてな」でさえも、時の経過とともに「さびしげなる」様子に移ろってしまうそのはかなさを「自らの奥」の心性に重ねてみたとき堪えがたき思いであろう。時間経過を空間の変貌という風景に置き換えての表現である。

〔12〕待ちつけて、泉の有様うちうちに問ひなどして、「扇引き、今宵は、さは」とおほせられしかば、「明けんが心もとなさに今宵と思ふに、人たちのけしきの暗くて見えざらんこそ、くちをしきさぶらへ」と申ししかば、つとめて、明くるやおそきとはじめさせたまひて、人たち召しすゑて、大貳の三位殿をはじめてゐあはれたりしに、「まづ、引け」とおほせられしかば引きしに、うつくしと見しをえ引きあてで、なかにわろかりしを引きあてたりしを、うへに投げおきしかば、「かかるやうやある」とて、笑はせたまひたりしことを、但馬殿といふ人の、「家の子の心なるや。こと人はえせじ」など興じあはれしに、そのをりは何ともおぼえざりしことさへ、いかでさはしまゐらせけるにかとなめげに、今日は、ありがたくおぼゆる。（pp.450-451）

同年6月の記述であるが、この部分は、1年前にタイムスリップして上巻で考察した「奥」なる場所の回想となる。「うちうち」「家の子」といった言葉がそれを裏付ける。「うちうち」⁽¹¹⁾とはまさに「奥」そのものである。少々のかわいい我儘は、天皇の「奥」に伺候する近臣のみが感受できるありがたさであろう。それが「こと人はえせじ」なのである。そして、再びそのときは、はしなくもなんとも思わなかったが、今になるとそのことが身にしみるといのである。「そのをり」と「今日は」という言葉の並置が、当時と今という時間経過を一層際立たせる。これによって長子が具体的な場所としての、自らの立ち位置の確認をしているのである。

6. 追慕の場所の現象（３） — わが身もおなじ身ながら

6.1 変らぬ場所と時間 — またたちかへり入る

改元されて天仁元年（1108）8月、鳥羽帝は内裏へ移御となる。

〔15〕香隆寺に参るとて見入れしに、「わが明け暮れ出で入りし門ぞかし。一昨年の十二月の二十余日にこそ、堀河院にうつろはせたまひしか。それに出でけんまにこそはありけめ。かぎりの日とも思はでぞ出でけんかし。今は、何ごとにてかはこの世にてまた入らんずる」と思ひしを、わが身もおなじ身ながら、またたちかへり入るぞ、心憂く、かなしくもおぼゆる。（pp.455-456）

さて待賢門をくぐると、予想していた通り何とはなしに自らの心が暗くなった。以前に、と上記の引用文に続く。堀河帝に出仕当時は馴染んだ門であったはずである。一昨年に堀河院に移られた折にこの門をくぐったのが最後であったのだ。しかしそのときはそれが最後になるとはついぞ思わなかったものだと悲しさがよみがえる。それがまた再び主をかえてくぐってしまった。時を経たにもかかわらず「わが身もおなじ身ながら」どうして再びこういうことになるのか、忸怩たる思いが綴られる。「門」という一種の空間的結界というフィルターをとおして時間が語られ、同じ身ながら以前とは異なる憂き心の哀しさを切々と表わしている。

6.2 追慕の構造 — 今の心地す

内裏に移ったその夜、鳥羽幼帝のそばに臥しながら、長子の思いが綴られる。

〔16〕つれづれのまに、よしなし物語、昔今のこと、語り聞かせたまひしをり、殿のあとのかたに寄りたてまつらせたまひしかば、そのまにこそさぶらはんは、なめげに見苦しくおぼえしかば、起き上がりて退かんとせしを、見えまゐらせじと思ふなめりとおぼして、「ただあれ。几帳作り出でん」とて、御膝を高くなして、陰に隠させたまへりし御心のありがたさ、今の心地す。いつのまに変われる世のけしきぞと、よろづの人たちのそのかみの人ならぬなかに、わればかりありし昔ながらの人、いかに結びおきける前の世の契りにかと、ものの思ひつづけられて、あはれしのびがたき心地す。（pp.457-458）

しかし、繰り返される内裏での営みを見聞きするにつけても、思いはどうしても堀河帝とのつながりから抜けでることができない。ずっと一昨年の御膝の陰の思い出にタイムスリップする。ここでの御膝の陰は、上巻の死の床に臥す場面とは異なる日時の出来事であろう。しかしこの同じ動作によって奥に「奥」をつくり長子をかばうことは2人にとっては至極当然のことであったのかもしれない。『日記』全巻をとおして3回記述されている。甘美な思い出に浸れば「今の心地す」とはいえ、御世は移り、伺候する人々も移ろい、「わればかりありし昔ながらの人」というなかで、「前の世の契り」とまで述べて、その恨めしい時間をたどる。

6.3 形見としての場所 —見し人にあひたる心地す

次の３つの段は、具体的な空間を記述している。馴染んだそれぞれの場所をあげ、その懐かしさを、今見れば「見し人にあひたる心地」がすると擬人化して述べている。これは内裏という許されたものしかうかがえない内部を事細かに記述することにより、自分の位置を明らかにしようとしているとも受けとれる。

〔１７〕参りて見るに、清涼殿、仁寿殿、いにしへに変はらず。台盤所、昆明池の御障子、今見れば見し人にあひたる心地す。弘徽殿に皇后宮おはしまししを、殿の御宿直所になりたり。黒戸の小半菰の前に植ゑおかせたまひし前栽、心のままにゆくゆくとおひて、(p.459)

〔１８〕御前におはしまして、「われ抱きて、障子の絵見せよ」とおほせらるれば、よろづさむる心地すれど、朝餉の御障子の絵、御覧ぜさせ歩くに、夜の御殿の壁に、明け暮れ目なれておぼえんとおぼしたりし楽を書きて、押しつけさせたまへりし笛の譜の、押されたる跡の、壁にあるを見つけたるぞ、あはれなる。(p.461)

〔１９〕内の大巨殿朝餉の御簾巻き上げて、長押のうへに、殿さぶらはせたまふ。縁に、左衛門の佐、いと赤らかなる袍着て、ことおきてて。(p.462)

また第１８段の「押されたる跡」についても検討が必要であろう。９月、幼帝を抱っこしてお連れしていたときのこと、壁に残された跡を見つける。これは「夜の御殿」の壁に堀河帝が貼っておかれた笛の譜の跡である。ここで重要なのは、これが笛の譜の跡であると知っているのが長子だけであろうことである。事情を知らない人々にとっては、たんなる傷のようなものにしか見えない。その思い出におもわず涙することができるのも長子だけであろう。故院とのゆるがせない絆であり、追慕を媒介とした「顕界」と「冥界」の生死の往還と言えよう。その入口としての「跡」と見なければなるまい。鳥羽幼帝を抱いたまま涙する作者を再び現実に引き戻すのは、やはり幼い帝の声である。大人たちの世界に一人あって声を発する幼子と、旧帝の思い出にやはり黙して一人すぎる作者とのそれぞれの孤立と交流⁽¹²⁾も悲哀に満ちていると読み取れる。

7. 追慕の場所の現象（４） —おはしますところ

7.1 「奥」なる場所 —向かひまゐらせたる心地す

ここでは、堀河帝には最後となった先年の五節の折、雪の日の朝の淡い思い出が綴られる。

〔２１〕雪の降りたるつとめて、まだ大殿ごもりたりしに、雪高く降りたるよし申すを聞こしめして、その夜御かたはらにさぶらひしかば、もろともに具しまゐらせて、見しつとめてぞかし、(中略) 玉、鏡とみがかれたるももしきのうちに、もろともに御覧ぜし有様など、絵かく身ならましかば、つゆたがへずかきて人にも見せまほしかりしかど、(中略) わが寝くたれの姿、まばゆくおぼえしかば、「常よりみめほしきつとめてかな」と申したりし、をかしげにおぼしめして、「いつもさぞ見ゆる」とおほせられて、ほほゑませたまひたりし御口つき、向かひまゐらせたる心地するに、(p.465)

「これ、聞け。いみじき大事出で来にたりとこそ思ひあつかひたれ。雪のめでたさ、御目さめぬる心地する」とて、笑はせたまひしなど、思ひ出でられて、つくづくと思ひむすぼほるも、ただも御覧じ知らず、(p.466)

さきにも確認したが、堀河帝はまだ往時の慣例どおり、夜には宝剣とともに、「夜の御殿」で共に寝るということが行われていた。よって「夜御かたはらにさぶらひしかば」ということは「夜の御殿」に伺候していたと解される。雪が降ったとの知らせで、朝早く雪を見るために２人で連れ立って寝所を出る。本段においても引用文の前後に、長くなるので略したが、風景描写・色彩描写がていねいになされていることは、ここでも留意すべきことであろう。この情景描写によってやはり自分の立ち位置の確認が行われているのである。「玉、鏡とみがかれたるももしきのうち」にありながら、そこに自分はなんと「寝くたれの姿」⁽¹³⁾のままで、さらに誰あろう天皇と共に在るのである。本段には「もろともに」という言葉が３箇所みられる。これが作者の主眼の１つであろう。天皇とともに朝を迎え、寝乱れた姿のままで、もろともに清涼殿の雪を見つめる。そこで交わされる両者のわずかな言葉のやり取りも甘美であり、この「奥」なる場所の特質を際立たせているのである。

しかし、これだけの想いを表出しながら、『日記』には、帝との贈答歌⁽¹⁴⁾が記されていない。二人にとって「向かひまゐらせたる」状態こそが自然であり、まさにまなざしの交感という「ことばのいらぬ世界」において結ばれていた二人称的関係といえよう。その奥に秘められた甘い思い出も、再び幼帝の声で現実に引き戻されることになる。ここでも幼い鳥羽帝という現在（顕界）と、故堀河帝という過去（冥界）とが、入れ子状態になって交

錯していることがみてとれる。時間の変化を、回想における時制の往来で表現しているともいえよう。

7.2 時間的場所 —おはしますところ

堀河帝が崩御されて、「おはしまさましかば」と懐かしさが募るばかりである。いつにもまして偲ばれるので、例の香隆寺に参ることになる。それはなぜかといえば「おはしますところ」であるからである。

〔29〕十月十余日のほどに、里にゐて、よろづのことにつけても、おはしまさましかばと、常よりもしのばれさせたまへば、御姿にこそ見えさせたまはねど、おはしますところぞかしといへば、香隆寺に参るとて、見れば、木々の梢もみぢにけり。（p.476）

「さばかりわれもわれもと男女のつかうまつりしに、かくはるかなる山のふもとに、なれつかうまつりし人一人だになく、ただひと所まねきたたせたまひたれども」（中略）

尋ね入る心のうちを知り顔にまねく尾花を見るぞかなしき （p.477）

堀河天皇は火葬にふされた後、遺骨がこの香隆寺に安置されたという。ここではさらに加えて、「おはします」とは誰が（何が）、そしてその「ところ」とは何処か（場所）という２点について考察をしておきたい。

堀河天皇は火葬され、その「身」は煙となって天空に昇ってしまった。しかし、当時の人々にとっては、その死の要因となった身を離れた「魂」の行方も心の中に抱いていたであろうことは想像し得る。その魂との出会いの入口となりうるのが、なにある香隆寺ではなかったか。「顕界」（この世）にある長子が、「冥界」（あの世）の故院に見（まみ）えるには、なんらかの境界をとおしてその魂に見（まみ）えなければならなかった。その入口に相当するのが香隆寺であった。つまり入口としての「場所—異界」と位置づけられよう。「おはしますところ」とは、そういう実体としての場所性を具した、綜体としての空間性を意味していると考えられるのである。それゆえにこそ、次の引用文となる。この「ただひと所まねきたたせたまひたれども」の箇所は参考諸書ともに原文に忠実な現代訳となっているが、『玉井版』のみは語釈で、尾花を先帝の面影とダブらせているとする。しかし、それは長子にしか見えない姿であり、その場所としてはさきに見たように、先帝の魂のありかとして香隆寺の入口の向こう（つまりは「奥」）でなければならない。香隆寺の「奥」なる場所は長子にとって、まさしく「冥界」なのである。その冥界からの先帝のまなざしを受け留めた上での、数少ない長子自身の歌となる。つまり顕界にたたずむ自分の「心のうちを知り顔に」へとつながるのである。この言葉（歌）の彼我の往還により、向こう側からの先帝のまなざしを長子がたしかに信受していることが確認できよう。

7.3 「在る」場所 —もろともに

次は上巻の序に当たる部分であり、『日記』全体の冒頭に置かれている。しかし執筆の順序からいえば、上巻（序を除く）、下巻、そして上巻におかれている序文とされており、下巻ではないが敢えて最後に引用して検討する。

〔上巻１〕思ひ出づれば、わが君につかうまつること、春の花、秋の紅葉を見ても、月曇らぬ空をながめ、雪の朝御供にさぶらひて、もろともに八年の春秋つかうまつりしほど、常はめでたき御こと多く、朝の御おこなひ、夕べの御笛の音忘れがたさに、なぐさむやと、思ひ出づることども書きつづくれば、（p.392）

この引用部分においても、あるいは書かれている事柄がすべて本文において想い出として詳しく述べられていることから、この序文は本文を書き終わって後の、全体の序として書かれたものとして首肯できよう。

また全体を通して、「音」の記述が効果的に取り入れられていることが１つ留意すべき点であろう。なにげない日常の音、哀しみにくれる声、モノを壊す音、笛の音は間接的にその譜の痕跡を記すことで表わされ、幼帝の声は作者をしてたびたび異なる時間へと誘う。

しかし、ここでは「もろともに」という言葉を忘れてはならない。下巻第２１段、ある早朝、寝きたれ姿のまま、２人してみつめた清涼殿の雪の日は、まさしく「もろともに」であった。その段に３箇所と、この序文に２箇所「もろともに」が使われている。堀河帝と「もろともに」在ることが、作者にとっての「奥」なる場所なのであり、さらにそれは時間的にも、空間的にも、「もろともに」でなければならなかった。思いもかけず故院となられてからも、「顕界」に在る長子と、「冥界」に在る故院の魂とはやはり「もろともに」在るのでなければならなかった。長子の切なる思いは、この両界を往還しつづけ、その閉じられた円環は、やがて『長秋記』元永２年

（1119） 8月23日の条⁽¹⁵⁾にみられるように、ついに破綻をきたすことになるのである。

8. むすび

本稿では『日記』（下巻）について、そこに表出される時間性の観点を中心に、故院への追慕の場所の現象を「奥」なる視点から考察を行った。上巻は臨終の出来事が展開される空間の表出が優位を保っていたが、下巻では追慕・という時間の表出が優位をもっていると考えられるからである。当然ながら「奥」という概念としての場所⁽¹⁶⁾は、時間性と空間性との双方を包含した綜体として位置付けられ、それは古来の語義としても明らかである。

なお今一度、時間の捉え方として、2つの流れをみておかなければならない。1つは歴史的時間として過去、現在、未来と直線的に刻まれるものである。下巻において具体的な年次表記の他に、「昔」「今」「見し世」などと記され、これはいわば顛界における時間である。もう1つは、「前の世」「この世」「のちの世」の言葉で当てられた円環的な時間であり、これもいわば冥界における時間表現ともいえよう。もちろん双方が厳然と区別されるはずは決してなく、それぞれがまさしく時に応じて連関しあって当時の時間認識の綜体があったと考えられる。

また自分の外に広がる「奥」なる空間性が先稿での上巻で見出されたのに対し、本稿の下巻においては自分の内に広がる「奥」なる時間性に着目した。追慕・回想という心の内の現象は、空間（ここ）というリアルを喪失しつつ、心の内というバーチャルな空間（虚）における「奥」としてとらえうる。そこでは時間のみがリアルとなる。しかし当時の時間と空間は別個のものではなく、むしろ相互補完の関係性を深く認めなければならない。

さて、『日記』下巻（追慕の記）における「時間」表現には、大きく次の3つに分類できるであろう。

- ① 単純過去の表出（思い出の記述）
- ② 過去の出来事を現在に引き付けて追慕する（昔との比較回想）
- ③ 円環する時間表現（回想の中にさらに回想が入り込む、いわば時間の入れ子構造）

さらにそこでは時間における空間性が浮かび上がることも確認した。それは古代からの時間認識の様態として認められたものである。下巻第1段でみたように、回想される過去と、執筆現在とを往還する運動性（振れ）は、いいかえれば時間の空間性が表れているともいえる。あるいは時間と空間との相互補完作用にも留意しなければならない。同第4段における月次行事に沿った記述は逆に、時間性が優位性を保ちながら後退しているとも読み取ることができ、その補完としての空間（風景）描写が際立つことになると考えられる。また、時間経過を具体的な建物や室の空間変貌という風景に置き換えての表現もとられているといえる。

そして、亡き帝を中心に回想がめぐり時間が円環を形成し、重層化して入れ子状態となり、作者のなかで閉じられたサークルが出来上がる。これはもはや「仕切り」そのものであり、「奥」なる場所に通じることになるのである。つまり「御姿にこそ見えさせたまはねど、おはしますところぞかしといへば、香隆寺に参るとて」と記されるように「奥」への入口が、ここでは香隆寺であり、「顛界」に在る作者はそこからしか「冥界」に在る故院をまなざすことはできないのである。香隆寺の門の向こうはまさしく「奥」なる場所であり、そこが再び往時のように2人が「もろともに一在る」ことのできる場所としての「時一空」なのである。しかしこの「奥」は、自らの立ち位置からしか見ることができず、それを求めようとしても、するりとそのまた奥（向こう）へと移ることになり、「奥」への願望は永遠の目標にならざるをえない。「奥」の本質として、実体のとらえどころのなさ、つまり「奥」は感受できているが、そのものを実体として可視化できないというパラドックスを内包しているといえようが、しかしその相即としての実在性も認められることは、これまでの独自の考察から明らかである。

最後に先稿と本稿にて平安末期の古典文学テキストを取り上げ、「奥」の視点から「天皇の死（看取りから追慕へ）」をめぐる記述描写を詳細に読み解いて得た「看取りの場所」の全体構造とその独自の建築論的見解は、現代日本の超高齢社会における「終の住まい」の実相を考える上で、極めて示唆深いものであることを付記する。

注

（1）川本・市川(2020) “奥の視点による“看取りの場所”の建築論（１） — 『讃岐典侍日記』（上巻）に関する一考察 —”
『福井工業大学研究紀要』第50号。

（2）久保田淳校注『徒然草』（第181段）新日本古典文学大系39，岩波書店，1989年。

（3）石井文夫校注・訳『讃岐典侍日記』新編日本古典文学全集26，小学館，1994年，解説文p.489。

- (4) 池見澄隆編著(2012)『冥顕論 日本人の精神史』法蔵館。

「顕界」とはわれわれの生きている日常・現実の世界であり、それを越えた非日常・非現実の世界を「冥界」とよんでいる。さらに「顕界」における「冥界」の現われをここでは「異界」と称している。

- (5) 益田勝美“日知りの裔の物語 —『源氏物語』の発端の構造—”(初出は 1959～1966)

鈴木日出男編(2006)『益田勝美の仕事 2』Ⅰ火山列島の思想, ちくま学芸文庫。

- (6) 源師時『長秋記 二』p.176, 『増補 史料大成』臨川書店, 1965 年。

- (7) 加藤周一(2007)『日本文化における時間と空間』岩波書店, p.36。

- (8) 永藤靖(1979)『時間の思想 古代人の生活感情』歴史新書〈日本史〉176, 教育社。

同 (1984)『中世日本文学と時間意識』未来社。

古代的なものの崩壊、価値観の転倒が実は中世の文学作品の表現の核であるとし、時間の観点からは、時間は流れるという必然性を持ちながら、同時に偶然性を含んだ非連続なものとして意識される、とも指摘する。

- (9) 三宅和朗(2010)『時間の古代史 霊鬼の夜、秩序の昼』歴史文化ライブラリー, 吉川弘文館。

古代の時間には朝・昼・夕・夜という人間の感性にかかわる時間と、漏刻による、機械的な時刻とがあるとし、地域社会の自然暦と国家の具注暦との関係に対応させる。(p.12)

- (10) 稲賀敬二(1965)“讃岐典侍日記の死と生 —典侍腹の御子たち—”『國文学』, 学燈社。

- (11) 五味彦彦(1991)『藤原定家の時代 —中世文化の空間—』岩波新書。

頼朝の請け負った殿舎全体は、最初の褻御所や御湯殿・台盤所を始めとして、晴(ハレ)と褻(ケ)に空間を分けるならばケの空間として機能しており、院の内々の場、私的な空間と見てよかろう。(p.164)

文治4年(1188)後白河院の御所六条殿が焼失した際に、その再建に当たり権力の頂点にあった頼朝が選んだのが、ことごとく法皇の私的空間である「内々の場」であり、つまりは「奥」との関係性を求めたのであろう。

- (12) 岩佐美代子(2001)『宮廷文学のひそかな楽しみ』文春新書202, 文藝春秋社。

- (13) 藤井由紀子(2010)“『源氏物語』と中世王朝物語の距離 —「わららか」・「寝くたれ」の表現史—”

『詞林』第48号, 大阪大学古代中世文学研究会。

「寝くたれ」の用例は、『源氏物語』以前の散文作品の用例にはほとんど見出せなく、また、『源氏物語』における用例はすべて男君の姿であったとする。本来、女君の「寝くたれ」の姿は、第三者に見られるべきものではなく、それを見ることができるのは、逢瀬の相手の男君だけである。

- (14) 篠塚純子(1981)“『讃岐典侍日記』と人生 —御ひざのかげ—”『解釈と鑑賞』, 至文堂。

- (15) 源師時『長秋記 一』p.159, 『増補 史料大成』臨川書店, 1965 年。

これによれば堀河天皇の御霊と称し、あらぬことを奏上し、白河院の意向により、兄道経に預けられたとされる。本文でみたように、故院ともろともに在った「奥」の信受が、長子にとって救いの機能を果たしていたと考えられよう。しかし時間の経過とともに、その機能も衰え、ついには上記のような結果に至ったと想像できる。

- (16) 玉腰芳夫(1975)“隔て現象における場所の構造 —源氏物語の場合—”日本建築学会論文報告集 第235号

さてこの場所は事物的な住居とは云え、それはそこに住い、生きる人間にとっての場所であらねばならず、その事物に於ける人間の解明をぬきにしては問題なりえない。その意味でこの場所の構造は正に現存在の構造であり、ここと今に係わる事柄である。そして今が過去把持と未来把持の緊張の中にあるように、ここはそことの関係にある。それについて M.HEIDEGGER が「現存在は、その空間性どおりに、さしあたり決してここにあるのではなくて、そこにあり、そのそこから現存在は自分のここに帰ってきます」と指摘するように、その関係の解明は正に優先的にそこに係る現象的空間に準拠せねばならぬのは明白である。我々はそれを源氏物語に於ける云はゆる隔て現象に限定して、すなわち隔てという現象的空間から場所を解明する。隔てとはそこそことの関係の現象の一つ、近さ—遠さという距離現象に解消されぬまでも、それに属するからである。(下線、引用者)

住まいの場所を考えるにあたって、この指摘は重要である。仕切りという「隔て現象」は、単なる物理的な隔離現象にとどまることなく、空間現象とともに、時間現象へも関わってくるのである。

この「隔離」現象の分析については、先稿(注31)で増田友也の論考を取り上げている。

(2020 年 9 月 10 日受理)